

めあて 文章を正しく読み取ろう

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。
森林資源と聞くと、ほとんどの人はマテリアルとしての木材を思い浮かべるだろう。木材は、板にするか角材にするか、あるいは丸太のまま使うかの違いはあっても、(A)イメージだ。

しかし地球規模で眺めると、木材のもっとも多い使い道は、エネルギー源である。つまり(B)。今風に言えばバイオマスエネルギーだ。
と言っても世界の主流は、チップボイラーや木質ペレットのストーブ、あるいは発電施設における使用ではない。大地で直接燃やすほか、石や土によるかまどで煮炊きする、暖房に使うといった原始的な燃料利用が大半だ。木炭さえ、そんなに普及していない。人口増加とともに木材の燃料消費は膨れ上がり、アジアやアフリカなどの乾燥地帯では、植生が失われることが大問題になっていく。現在「砂漠化」が進むとされる土地の多くは、燃料として過剰利用されたため植生が失われたケースが少なくない。

日本もつい最近まで①そうだった。考えてみれば、エネルギー源がほぼすべて化石燃料になったのは、戦後である。明治以降も庶民は相変わらず薪(まき)を利用して。都会では、煙の出ない木炭が多く使われていた。私も、子供の頃は火鉢があったし、本家を訪れると風呂を薪で焚(た)いていた記憶がわずかに残る。①

日本の木炭生産量のピークは、一九五七年の二二二万トン。当時の製炭人口は一〇〇万人を超えていた。木炭をつくる過程で、原料の木材は半分以下の体積になるから、消費された木質はその倍以上だろう。薪の消費はさらに多かったから、莫大なバイオマスが燃料として使われていた。②

江戸時代は、薪や炭こそ山の重要産品だった。都市部へ薪炭(しんたん)を供給することが、山村の最大の役割であり、現金収入の道だったのだ。そして②地方の経済を支えていた。③

例を挙げると、当時から大都市だった大坂は、人口が多く銅の精錬など工業も盛んだった。必要な薪や木炭は、周辺の里山からの供給ではとても間に合わなかった。記録によると、土佐(高知県)のほか阿波(徳島県)、伊予(愛媛県)などの四国各藩のほか、遠く九州からも運ばれていた。④

江戸時代初期に土佐藩の執政(家老)だった野中兼山(一六一五〜六三三)は、大坂の薪市場を土佐新で押さえるために尽力した。当時の土佐藩の財政を支えたのは、薪なのだ。一方で薪の持続的生産も心がけ、その仕組みをつくったことで知られる。薪運搬船の数と積載量を固定し、運航回数も制限して薪の出荷量を厳しく制御したのである。薪の量に合わせて山を順繰りに伐採していく「番繰り山制度」もつくった。木は一五〜二〇年で再び伐採できる太さになる。だから③持続的な薪ビジネスが展開された。

しかし、兼山の失脚後は守られなくなり、すぐに船の数は五倍、積載量も運航回数も膨れ上がった。そのため、あつという間に山は荒れたという。おかげで江戸時代後期の大坂への薪供給は、より遠い九州各藩に移った。

薪を大量に使うのは、鉄や銅など金属精錬に加え、陶器や瓦などを焼く窯業、製塩業、さらに和紙づくりや染色業、和三盆(砂糖)生産まで幅広い。その点に着目すれば、森林はエネルギー資源であり、薪の生産はエネルギー産業だったのだ。

(田中 淳夫「森と日本人の1500年」)

※マテリアル＝材料。原料。素材。※バイオマス＝生物を資源として利用すること。また、資源として利用される生物のこと。※チップボイラー＝細かく加工した燃料用木材で高温の蒸気や温水をつくる装置。

一 (A) (B)に入る言葉として最も適切なものをそれぞれア、イから選
びましょう。

- ア 燃やして熱を利用する
- イ 紙に加工して利用される
- ウ 建築や家具などに利用される
- エ 果実を食用として利用する

二 下線部①はどういうことですか。二十字以内で説明しましょう。

三 次の文は、本文の1〜4のどの部分に入れるのが適切ですか。番号で答えましょう。

そのため、どれほどの森林が伐採されたことか……。

四 下線部②とはどういうことか。主語を明確にして説明しましょう。

五 下線部③の説明として最も適切なものをア、イから選びましょう。

- ア 市場での薪の売値を高く保つために流通する量を減らし、収入が多くなるよう計算したこと。
- イ 運搬船一せきあたりの積載量を増やし運航回数を減らすことで、薪の輸送効率を高めたこと。
- ウ 山を順繰りに伐採する制度により、薪の生産者の生活も藩の財政も、ともに豊かにしたこと。
- エ 薪の生産や流通を厳しく管理し、いつまでも山から原料木を供給できるように配慮したこと。

振り返り	三	-A
	四	-B
		二
	五	